

B型肝炎ワクチン

①B型肝炎ってどんな病気？

B型肝炎ウイルスによる感染症です。このウイルスは、体に入ると肝炎をおこし、長く肝臓に住み着いて（慢性化・キャリア化）、肝硬変や肝臓がんを引き起こします。毎年約2万人がかかっています。非常に感染力が強いウイルスで、感染経路はB型肝炎を持った母親から分娩の時に子供にうつったり（母子感染）、父親や家族や友人から、あるいはウイルスに汚染された血液の輸血や性行為などでの感染（水平感染）が知られています。しかし原因不明の場合もよくあり、特に子供の場合は原因不明が多いとされます。

3才未満の子供が感染すると慢性化（キャリア化）しやすいことは知られていましたが、最近では3才以上で感染しても慢性化しやすい遺伝子型AというタイプのB型肝炎が日本でも広がっています。知らない間にキャリアになった家族などから子供への感染もめずらしくありません。

以前はB型の急性肝炎にかかっても治癒したらそれで完治と考えられていましたが、B型肝炎ウイルスの遺伝子は肝臓内に一生残ることが最近になって分かってきました。抗がん剤治療などで免疫力が低下すると重症の肝炎を発症するようです。

②症状や経過

肝炎になると疲れやすくなって黄疸が出ます。ただし症状はごく軽い場合も多くあります。現在もっとも流行している遺伝子型AによるB型肝炎では慢性化（キャリア化）することも少なくありません。

③重症になると・・・

急性に発症した肝炎が急激に非常に重い症状になることがあります。劇症肝炎と呼ばれ、生命が危険になります。慢性化して適切な治療をしないと子供でも肝硬変、肝臓がんへと進展します。無症状の子供でも肝臓に住み着いた肝炎のウイルスは一生残り、免疫力が低下すると再発して、重症化することもあります。

④予防は？

B型肝炎ワクチン（任意接種・不活化ワクチン）で予防します。B型肝炎を予防するということは、肝臓がんを予防することにもなります。B型肝炎は世界で初めてのがん予防ワクチンです。

母親がB型肝炎キャリアの場合は、生後1週間以内に産科施設でB型肝炎予防用の免疫グロブリンを接種します。母子感染予防として健康保険で接種出来ます。

⑤接種間隔は？

1回目から4週後に2回目、2回目から20週～24週後に3回目を接種します。